



2017 合同教育研究全道集会

発行:2017 合研実行委員会事務局

教育の本質を見つめ直す2日間 子ども中心の教育を実践しよう！

2017年全道合研にご参加の皆さん、2日間大変お疲れ様でした。お忙しい中ご参加いただきありがとうございます。また、全道合研の運営にかかわってくださったスタッフの皆さん、司会者・共同研究者の皆さん、ご尽力に心から感謝申し上げます。

テーマ討論は、①「新「共通テスト」で北海道の教育はどうなるのか」、②「改訂学習要領で子ども・学校・教育がどうかわる?」、③「子どもの貧困と地域・学校」、④「北海道150年」～今を生きるアイヌの視点から～」をテーマに、合計約200名が参加し議論が交わされました。

教育の夕べでは斎藤貴男さんにご講演いただきました。「国民が真実を知るために」と題し、いかに国民が真実を知らされていないか、北朝鮮のミサイル報道などを例に、生のジャーナリストの声を聞きました。情報に翻弄されないためには、安易な情報手段に頼らず、自分で考え話し合うことが重要だと語りました。斎藤さんが話された「読んで、見て、語り合って、考える」ことは、まさに全道合研の中で私たちが大切にしてきたことであり、改めてこの教研集会の意義を感じる事ができました。

1日目の午後と2日目は24の分科会が開催され、多くの貴重な実践がレポート報告されました。また、初参加の方や一般の参加もあり、新しい視点で議論が交わされるとともに、今後につながる分科会となりました。

この2日間で、日々の実践を交流し捉え直す中で、教育の本質を見つめ直す機会になったでしょうか。明日からまた慌ただしい毎日が始まりますが、ここで考えた教育の本質を忘れないように、子どもと向き合っていきます。

ご参加の皆さん、本当にお疲れさまでした。また来年お会いしましょう。

2017年11月4日

2017 合同教育研究全道集会実行委員会 事務局一同



「教育の夕べ」の感想

- ・斎藤貴男さんのお話を聞いて改めて感じたことは、政府や政治家、マスコミの劣化と、それよりも悔しいのは国民一人ひとりの劣化です。
- ・ジャーナリズムの内部も自分が思っているよりも深刻だった。教師は「知りたい人に伝える」だけでなく、まず自身が関心を持たねばならないが、自分も足りないし不十分だし、周囲の同年代も足りない。

テーマ討論・分科会の感想

- ・大学にいとデータから考えることがどうしても多くなってしまいが、実際貧困の子どもと日々関わっている方の話を聞くことで、データが示している本当の姿がわかった。子どもの6人に1人が貧困と言われている今、数字だけでなくその裏に隠れている現実を知ってもらい、みんなであげられる社会になればいいと思う。③
- ・貧困そのものを解決する政治をしっかりと求めたい。子どもたちが背負うには荷が重すぎる。障害児教育に「懲戒」を持ち込ませない実践を創り出そう!!③
- ・北海道での合研という意味で、アイヌの人たちの問題を取り上げ続ける事は大きな意味があると思います。④

日程や会場などについて・ご意見

- ・他の分科会も聞きたかったので、時間をずらして聴けたら良かったなと思った。

* テーマ討論・分科会アンケートへのご協力をお願いします！

テーマ討論紹介

今年のテーマ別討論は、①「新「共通テスト」で北海道の教育はどうなるのか」、②「改訂学習指導要領で子ども・学校・教育がどうかわる?」、③「子どもの貧困と地域・学校」、④「北海道150年」～今を生きるアイヌの視点から～」をテーマに、合計約200名が参加し議論が交わされました。紙面の都合でぜんぶご紹介できませんが、テーマ①②での討議の様子をご紹介します。テーマ討論全体の様子は、このあと合同教研ホームページや高教組、道教組、全大教の情報などでごらん下さい。

① 新「共通テスト」で北海道の教育はどうなるのか



参加者数は約30人。パネラーの徳長誠一さん(北見北斗高校)は、勤務校で行っている探究型学習のとりくみの紹介にはじまり、「新テスト」導入のねらいと問題点、道内の高校教育への影響などについて、考えを述べました。評価や調査書作成の業務の増大により教員の負担は限界を超え、高校教育の崩壊が起こる懸念があることを強調されました。榎原尚宣(北海道大学工学部3年)さんは、経済的な理由で勉学を断念する仲間をなくしたいという思いから愛知県高校生フェスティバルにとりくんできたこと、発達障害の傾向を持つ者を受け入れることのできない教師や学校の問題などについての思いを語りました。フロアの発言を通じて見えてくるのは、絶対的な条件整備の遅れ、地域間の格差、学校・教科・教師の分断など、「高大接続改革」を通じて見えてくるのは、解決しなければならない教育問題です。教育をテスト産業に

支配させないために、高校・大学の関係者が力を合わせ自律的な教育の研究と実践を行っていく必要があります。(北海道大学・光本滋)

② 「改訂学習指導要領で子ども・学校・教育がどうかわる?」



司会者から、学習指導要領の資料をいながら簡単に今回のテーマ討論の目的や流れの説明があり、続いてパネラー3名から話題提供がありました。

パネラーの松尾先生(檜山)からは、学校が窮屈になり、トップダウンで降りてくることが多い。学力・体力を数値で子どもたちを追い込んでいる。中村先生(上川)からは、市教委からミニマムスタンダードが示され、平成30年完全実施で授業時間を1コマ増やす、土曜授業の振替はない。6時間授業が増え、子どもも大変ですし、会議をする時間も足りません。保護者の榎木さんからは、毎日宿題を出されるけどもどうなのか、朝練のある部活動はどうなの。英語に対する不安に対し、対応を早めにしてほしい。そのような話が出されました。

参加者からは、「教師も受け身ではなく主体的にかかわることで周りもかわる。子どもたちが学びたい事と、私たちが学ばせたいことが違うのではないか。学校のお手伝いで、スキーやミシンの授業は先生も助かるのではないか。私の町ではコーディネーターがいて、地域の人が学校にお手伝いにきます。学校行事で縦割りグループを使い、大変なので困っています」などの発言が出されました。

最後に司会者から、「今日のテーマ討論が、地域とともに学校を豊かに楽しくするきっかけづくりになればと思います」とまとめがありました。